関東船橋氏について

奥富敬之

一

江戸幕府の医官家転変の情況を、関東船橋氏の実例をもって、一望してみたいと思う。基本的な史料は、『相模拾遺風土記』、『旧高旧領取調帳』、『寛永諸家系図纂』、『寛政重修諸家譜』、『尊卑分脈』、『系図纂要』、『続群書類従』系図部、相模国西富岡村「堀江家文書」などである。

二

船橋氏の世系は、天武清原氏である。織豊期の清原秀賢が、山城国舟橋保（大山崎町）を領して舟橋と改姓した。以降、この嫡系は京都にあって、明経道をもって朝廷に仕え、代々の天皇の侍読であった。いわゆる「京都舟橋氏」である。

秀賢の末子元理が、「関東船橋氏」の初代である。公家の典礼故実に通じていたので、徳川家康に招かれて江戸に下ったという所伝があるが、信憑度は低い。だいたい、元理自身が幕府に仕官したという徴証は、まったくない。

元理は京都にあって、すでに医を業としていたらしい。「長庵」という名を持っていたことが、それを暗示している。東国に下ったのも、新興の江戸を目指したものだろう。このとき、「舟橋」を「船橋」に改めた。京都の本宗家を憚ったものらしい。

その子玄晧（はるあき）の代の元禄三年（一六九〇）九月、幕府に召し出されて寄合医になった。まだ二百俵の廩米取りで、石取りではない。

同四年七月、奥医師に取り立てられ、同九月には「御匙」に昇り、同十二月に法眼位に叙せられた。しかし、同五年十一月、六十一歳で死に、江戸雑司谷（豊島区雑司ヶ谷町）の日蓮宗法明寺に葬られた。法名日寿。

その子玄恂（はるのり）は、父の死の一ヵ月前に御目見得の身分を得ていたが、家督嗣立直後は小普請組だった。二年後に寄合医になり、四年後に奥医師に上って法眼に叙せられ、六年後の元禄十年に「御匙」になった。

この間、『医語訓解』、『養生余録』などの医書を著わしたが、ともに現存しない。その前後の頃、相模国大住郡で五百石を給されて、廩米取りから采地給与に転じ、さらに武蔵国都筑郡で二百石を加増されている。

宝永三年（一七〇六）四月、医官三代の玄侃（はるたか）が嗣立して寄合医に任ぜられたとき、わずか十四歳だった。直後に御目見得の身分となり、享保十四年（一七二九）閏九月、番医に挙げられている。

宝暦四年（一七五四）五月、次男玄寛（はるひろ）が四代を嗣立、すぐに寄合医に任ぜられて将軍家重に御目見得し、同十二年五月、番医に挙げられた。

ところが安永七年（一七七八）十二月、

「病にをかされ、不束の願書を呈せしにより、家を譲りて隠居すべきむね、厳命を蒙」

ということがあった。ときに四十八歳。

ときに五代玄鼎（はるやす）は、十二歳だった。当然のことながら小普請入りしたが、天明二年（一七八二）三月、将軍家治に御目見得し、寛政四年（一七九二）六月、番医に挙げられている。

三

以降の六代もほぼ同様の生涯だった。そのことは、十一代宗恂の知行によっても、窺われる。

相模国大住郡

西金目村	不明
日向村	八一石四九六〇
大句村	一二四石九五六〇
小鍋島村	三五石五一九四
南金目村	四二七石九一五〇
小計	六六九石八八六四

武蔵国都筑郡

恩田村	五四石四九七五
上星川村	一八三石四二八〇
小計	二三七石九二五五
総計	九〇七石八一一九

明治維新によって失業した船橋宗恂は、旧知行所の金目村に居を移し、伊勢原町を経て、平間村七六番地に移転して、開業医となった。かつて将軍の脈をとった身が、農民の診療にあたることになったのである。

長男貫一郎は東京鎮台に徴兵され、明治十年二月、西南戦争で戦死した。次男銈吉郎は東京に赴いて西洋医学を学んだ。しかし、三十五歳で病死した。

三男、四男は、すでに夭折していた。末子徳太郎は医師にはならなかった。しかし、その次男宗次郎が、やがて医師になった。

明治二十四年二月に死んだ船橋宗恂の墓は、豊島区雑司ヶ谷の法明寺にある。

（日本医科大学）

前田慶寧の病状記録について

寺畑喜朔

昭和五十五年石川県の郷土史家大鋸彦太郎氏は死去した。死後遺族から同氏が長年にわたって蒐集した厖大な資料を「大鋸コレクション」として、石川県歴史博物館へ寄贈された。まだ、このコレクションは整理中であるが、過日、同学の今井一良氏から前田慶寧の病状記録のあることの指摘をうけた。

この記録は和紙五葉に綴られており、登場人物の史的背景からみて、明治五年の加賀藩第十四代藩主前田慶寧の病状記録（診断書）である。診察したのは、大学東校のテオドール・ホフマンと佐藤尚中で、ホフマンの和訳を担当したのは三宅秀である。

この綴の標題は「御容子書」で「忽布満　尚中　二氏ノ按」とあり、その内容はつぎのようである。

此患者左右両肺ニ結核ヲ以テ盈實シ就中右肺ヲ多トス